

健幸すまいるリフォーム

支援事業

利用者懇談会に参加

1月19日、今年度から始まった「健幸すまいるリフォーム支援事業（住宅リフォーム助成制度）」の利用者懇談会が新潟県商工開発局で開かれ、制度の充実に向けた改善要望が多く出されました。



懇談会には約10人が参加。「仕事が終わって、この制度でひと息ついた」「仕事が

少ない中、本当にありがたい」「仲間にも助成制度を数えてやって喜ばれた」などの意見が出されました。今年度も継続されること、新年度も継続されること、新年度が確定なことから「新年度は抽選でなく、5月位から仕事にかかれるように」、申請から決定、その後の助成金の振込みまでの期間を短くしてほしい、「バリアフリーの条件を無くせば、もっと使いたいです」との意見が出ています。

議題としては、建築組合の皆さんなどにも懇談し、より良い制度へ向け、改善へ力を尽くすこととしています。

健幸すまいるリフォーム支援事業実績

(平成24年12月4日現在)

種別	申請件数	補助金額	備考
一般世帯	981件	149,334,000円	上限 200,000円/件
子育て世帯	190件	48,132,000円	上限 300,000円/件
親子近居世帯	88件	21,499,000円	上限 300,000円/件
三世代同居世帯	240件	80,596,000円	上限 400,000円/件
事務費		1,000,000円	
合計	1,499件	300,561,000円	

単位：円

「転落のジマーナリズム」

北海道新聞（略称・道新）が、一年半にわたって連載した「北海道警察裏金報道」がジマーナリズムの代表を示し全国メディアに大きな影響を及ぼした。ところが、北海道警察が繰り返し広げる執拗な嫌がらせに耐えきれず、最後には「ヤミ取引」をもちかけるなど、新聞が警察にひれ伏した。「転落のジマーナリズム」の全容を暴いた本が衝撃を与えている。

道新は、発行部数200万部を誇る道内最大のメディア。その道新が2003年11月から2005年6月にかけて北海道警察の裏金を追及する大キャンペーンを張った。道新は情報を集めたり、情報提供者に謝礼する年間「億」の予算を正当に使わず裏金としてプール。領収書は末端の警察官たちに偽装させ、幹部が自在に使途を決める仕組み。

組織的な裏金づくりの動かぬ証拠である「裏帳簿」や「裏金指南書」など裏金づくりの詳細なキロまで暴きだした。道新による追及は、約一年半やむことがなく、その間に掲載した関連記事は14の0本を数える。

道新は、04年11月組織的裏金づくりを認め、組織のトップである本部長が北海道議会で謝罪。警察が裏金づくりを公式に認めたのは前例がなく、警察庁や全国の各警察にとって衝撃は計りしれない。道新による道新への巻き返しはじわじわ始まっていた。「ニュースソースを明けさせ」て追ったり、取材拒否、記者への相罵、道内の警察署に不買運動を呼びかけるなどの嫌がらせは数えきれない。挙げ句の果ては、道警ナンバー・ツーの元総務部長が、出版した本に文句をつけ名譽毀損訴訟を起す始末。

「不正経理問題」が発覚。弱味につけ込まれ報道機関としては「自殺行為」である「秘密交渉」にのめり込み、新聞が警察に頼んだ（高田昌幸著「真実」）。

裏金報道を担当した記者は配置替えや社を去ったり、職場から自由や民主主義も消えた。政治が強権的になってきたこの時代こそ、先人の教訓を活かしジャーナリストが力を発揮すべきときなのだが……。



広島日誌の代表質問 2月26日(火) 午後3時30分